

共感による経済活動を — 真実のアダム・スミス —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

経済学の父が提唱した市場経済に関する独自の学説は少なからず誤解されてきた。市場経済はあらゆる規制を排した自由放任主義によって発展するという解釈が主流になってきた。それは誤解というより曲解といっても過言ではないだろう。

18世紀イギリスの思想家アダム・スミス（1723—1790）は名著『国富論』を上梓して近代経済学の先駆者と讃えられている。とくに近年では際限なき市場競争を礼賛し、格差社会の要因となった新自由主義の元祖と祀り上げられてきた。

だが原典の『国富論』に自由放任という言葉は存在しない。当時は科学の進歩による産業革命が勃興する一方で貧困、戦争、財政難などの深刻な社会問題が一気に浮上した激動の時代でもあった。スミスは光と闇の只中で新たな社会を構想する。

感情と行為の公平な観察者

スミスはスコットランドの海沿いの街カコーディで生まれた。関税監督官を務めていた父は彼が生まれるまえに亡くなり、母の手で育てられた。

先進的な校風のグラスゴー大学で道徳哲学を学び、卒業後は奨学金を受けてオックスフォード大学のベイリオル・カレッジに進学する。しかし既成の古典教育に飽き足らず中退して故郷に戻る。エディンバラ大学で哲学、文学、法学の講義を受け持っていた頃、哲学者のヒュームと出会い、生涯にわたって親交を深めた。とりわけヒュームの主著『人間本性論』に多大な感銘を受ける。

母校のグラスゴー大学で論理学の教授に就任し、道徳哲学教授に転任後、学部長に選出された。のちにスミスは「私のこれまでの人生の中で最も幸せで名譽のある時期であった」と回想している。

教壇に立つ傍ら情熱を注いできた道徳哲学の研究の成果として1759年『道徳感情論』

を出版した。同書でスミスが着目した道徳感情とは自己と他者の共感だった。簡潔にいうと共感とは他者の感情と行為を適切に評価する能力を意味する。他者との共感を通じて人々は自己の感情と行為が日常的に評価されていることを意識し、他者から承認されることを望み、否定されることに抵抗を感じるようになる。

「人間というものをどれほど利己的にみなすとしても、なおその生まれ持った性質の中には他人の心をかけずにいられない何らかの働きがあり、他人の幸福を目にする快さ以外に何も得るものがなくとも、その人たちの幸福を自分にとってなくてはならないと感じさせる」と利己的な諸個人が共感によってつながることを力説している。

しかし現実の社会では自己と他者のあいだにしばしば利害の対立が生じる。利害の対立を解消



アダム・スミス像

するには当事者から独立した中立的な視点が必要だ。スミスはこの視点を「公平な観察者」と呼び、第三者の眼で物事を見ることの重要性を訴えた。

『道徳感情論』は広く話題になり、脚光を浴びたスミスはヨーロッパ全土で学問的名声を獲得する。

個人の利益は社会の利益に

グラスゴー大学退職後、スコットランド貴族の家庭教師として約3年間、フランスからスイスへ旅行する。滞在中ヴォルテール、ケネー、テュルゴーなどフランス思想界の重鎮と交流した。

イギリス帰国後は執筆活動に専念し、1776年に『国富論』を刊行する。原題は『諸国民の富』で富とは何かを探究した。スミスは貴金属と貨幣を富と考える従来の重商主義を批判し、富の源泉は人間の労働であるという労働価値説を主張した。重商主義に基づき貴金属と貨幣を蓄積するために輸入を規制する保護貿易は根本的に誤っており、生活必需品などを積極的に輸出入する自由貿易への転換を促す。スミスは保護貿易を「諸国民の間の貿易は、本来は連合と友情の絆であるはずなのに、不和と敵意の源泉となっている」と糾弾した。

そして利己的な諸個人の利益の追求は市場の価格調整メカニズムという「見えざる手」を通じて社会全体の利益につながると考えた。「自分自身の利益を追求することによって、個人はしばしば、社会の利益を、実際にそれを促進しようと意図する場合よりも効果的に推進する」と。

とはいえスミスは市場における身勝手な自由放任主義を奨励したわけではない。何よりも社会の利益を重視していた。『道徳感情論』で明らかにしたように人間は自己の利益だけを追求する血も涙もない合理的な経済人ではない。利己心と利他心の二面性を持つ。社会の利益は共感という道徳感情によって保たれる。「人間社会のすべての構成員は相互の援助を必要としているし、同様に相互の侵害にさらされている。必要な援助が愛情から、感謝から、そして友情と尊敬から相互に提供される場合は、その社会は繁栄し、そして幸福である」。スミスは愛情、感謝、友情、尊敬などの人間性が社会の繁栄と幸福に欠かせないと考えていた。

いわば『道徳感情論』と『国富論』は車の両輪

であり、どちらが欠けても真実のスミス像に迫ることはできない。自由な経済活動は他者への共感のもとに成り立つ。社会の利益は合理的な経済人ではなく共感を抱く人々によってもたらされる。

人間の可能性を追求する

『国富論』は反響を呼び、イギリス産業革命の理論の支柱と称賛される一方、重商主義批判などに反発する声も少なくなかった。同書でスミスは自由貿易を推奨する観点から保護貿易政策と共に植民地政策にも反対した。折しも『国富論』発刊の前年、イギリスの植民地であるアメリカは独立戦争を開始していた。スミスは「植民地建設の最初の計画を支配し指導した原理は、愚行と不正であった。すなわち金や銀の鉱山を探し求めた愚行と、無害な先住民の土地を奪い取った不正である」と論じて植民地主義者の怒りを買う。アメリカはその夏、独立宣言を公布した。

晩年はスコットランド関税委員やグラスゴー大学の名誉総長などを歴任し、67歳で他界する。生涯独身で死の数日前に未完成の草稿を友人たちに焼却させた。青年時代に関心を抱いていた天文学やニュートン力学に関する遺稿は『哲学論文集』として死後出版される。1895年、グラスゴー大学でスミスの講義を受けた学生のノートが発見され、のちに『法学講義』として公刊された。

生前『道徳感情論』と『国富論』の2冊の著作しか残さなかったスミスは法と統治の理論と歴史に関する『諸国民の法』の出版を計画していた。初版から5回にわたって改訂した『道徳感情論』でも同書の刊行を予告している。未完に終わった『諸国民の法』はスミスが精魂を傾けて研究してきた共感、公正、正義などの普遍的概念を法秩序に関連づけることを目的としていた。

実は『諸国民の法』だけではなく『国富論』もまた『道徳感情論』の哲学的体系に組み込まれていた。『道徳感情論』の申し子である『国富論』は経済活動で共感する人間の可能性を追求した史上初の経済哲学とっていいだろう。

余りにも有名な『国富論』で経済学者と見做されたスミスは世間の評判を意に介せず、みずからを哲学者と称した。